



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響：親への依存欲求・独立欲求に注目して(fulltext)
Author(s)	市毛, 睦; 大河原, 美以
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 60: 149-158
Issue Date	2009/2/27
URL	http://hdl.handle.net/2309/95630
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響

—— 親への依存欲求・独立欲求に注目して ——

市 毛 睦*・大河原 美 以**

教育心理学

(2008年9月26日受理)

1. 問題意識と目的

近代の日本では、子どもは「生まれてくる」という自然の営みとしてよりも「子どもを産む・作る」という親の側の意志・決断の結果としてとらえられ⁶⁾、少子化の進む現代では、社会状況や将来の不透明さが親たちに不安を増幅させ、親を満足させるような「よい子」を作り出そうとする傾向が窺える²⁾。

その一方で、いわゆる「よい子」の問題性・病理性が注目されてきている。例えば、成績も家庭環境も良好で一見何の問題もなさそうな子どもたちの非行¹¹⁾や、保護者の価値に合わせて頑張り続けてしまう現代型「優等生」の不登校⁹⁾、親の期待に応える思春期・青年期の「よい子」に多く認められる行為としての摂食障害や自傷行為、強迫行為、ひきこもりなどが挙げられる^{15) 17) 18)}。このように、「よい子」が、徐々にあるいは突然に、問題状況に陥ることは少なくないと言え、そこには親との関わり合いや親から受ける期待が影響を及ぼしているように見える。

親の養育態度や、親から子への期待などに注目し、それらの要因が子どもに与える影響を調べる研究は古くから行われており^{21) 24)}、近年になってからは、親の価値観や完全主義傾向が子どもに及ぼす影響などが研究されている^{8) 19)}。1980年代までは、「よい子」の問題は主に不登校などの分野で「優等生の息切れ型」として扱われていた^{9) 10)}。以下に「よい子」に関する先行研究のいくつかを挙げる。

まず、丹羽ら^{22) 23)}は、中学生を対象に、学校適応度が高いいわゆる「よい子」と周囲に認識されている子ど

もたちに注目した研究を行い、その結果「よい子」と呼ばれる子どもたちは、成人に近い自己意識の構造を持つ傾向があり、同年代の子どもたちと比べて、幸福感が有意に低く、日々学校において不快気分を経験していることが示されている。

山川²⁶⁾は、1981年から1999年までの文献で「よい子」の特徴として挙げられてきたものを整理し、考察を行っている。そこでは、「よい子」は、「本来持っているエネルギーを自分自身のために生かしている子」と、「自分の感情よりも周囲からの期待を重視して、評価が高くなるように振舞う子」に二分され、後者のような「よい子」を作り出す環境要因として、社会の風潮や親・教師の過剰期待によって、子どもの自己抑制が求められていること、また、親の過剰配慮や過干渉、無関心や放任、などを挙げている。

大河原^{12) 14)}は、保護者や学校への支援、子ども個人への治療援助を行ってきた臨床実践の中から、「よい子」がきれる現象について導き出された仮説への理論的な検討を行っている。大河原¹⁴⁾によれば、子どもの生理現象としてのネガティブ感情の表出を、親などの重要な養育者が否定的に語り適切な感情語彙を与えないという、コミュニケーション不全の問題を孕んだ養育環境に置かれた子どもは、身体の安心感により自らのネガティブ感情を制御する力が育たず、解離することで適応をはかる「よい子」を実現する可能性が高いという。そして、彼らの青年期以降の「キレ」を防ぐためにも、早期に親子のコミュニケーション不全を回復させ、子どもがネガティブ感情を自己に統合する支援を行うことの重要性を指摘している。

* 東京学芸大学大学院教育学研究科学校心理専攻 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

** 東京学芸大学教育心理講座 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

以上の先行研究から、幼いころから親に「よい子」であることを過剰に求められ、ネガティブな自分を拒否される経験は、子どもの本来の発達を妨げ、自尊心や感情など個人の内界にも、対人関係など外界とのつながりにも、困難を抱えさせ、生涯にわたって生きにくい状態に陥る可能性を高めることが予想される。よって本研究では、親から子どもへ託される様々な期待を、「親、もしくは他者から見て『よい子』であってほしいという望み」という観点から捉え直し、その願望を「よい子願望」と名づけ、青年期に位置する学生を対象に、児童期に主観的に親から感じていた「よい子願望」の程度と、自尊心に与える影響を調べることを目的とする。

2. 調査

2. 1. 予備調査

事前におこなった予備調査(2007年7月17日～26日に実施)では、独自に作成した親のよい子願望尺度と、Rosenberg (1965)の自尊心感情尺度²⁷⁾を用いて、大学生・大学院生を対象に調査を行った。その結果、回答者が児童期に親から受けていたよい子願望と現在の自尊心感情との間には負の相関が見られ、さらに、“小学生のときも現在も、親の期待に込めている人”の群が特に強い負の相関を示すという結果が得られた。

しかしながら近年になって、高い自尊心には適応的なものと不適応的なものがあることが理論的にも実証的にも報告され、予備調査で用いたRosenberg (1965)の自尊心感情尺度はそれらを弁別できずに測定している可能性が示唆されている^{1) 7)}。いわゆる「よい子」の自尊心感情は、他者の評価によって支えられている可能性が高く、同時に本来のありのままの自分自身を肯定的に受け入れることで発生する自尊心感情は低い可能性が考えられるため、自尊心感情の測定については、より適切な尺度の使用を検討する必要があることがわかった。また、予備調査で示されたような親の期待への順応性の高さは、未だに心理的に親の支配下にあることを意味している可能性が考えられる。このことから、回答者と親との心理的な関係を調べる必要があることがわかった。

2. 2. 本調査

2. 2. 1. 対象者と手続き

関東地方の大学生・大学院生306名に、2007年10月23日～10月30日に個別自記入形式の質問紙調査を実施した。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は10分程度であった。

2. 2. 2. 質問紙の構成

(1) フェイスシート

実施日、性別、年齢の記入を求めた。

(2) 親のよい子願望尺度(独自に作成)

予備調査で使用した尺度を基に項目の精選を行い、最終的に17項目を採用した。予備調査と同じく5件法で評定させた。

(3) 自尊感情を測定する尺度

伊藤・小玉^{4) 5)}が作成した、本来感尺度(7項目)と自己価値の随伴性尺度(14項目)を混合して21項目からなる尺度を作成し、使用した。この尺度を用いて、ただ自分らしくいるだけで感じられる自尊感情である“最良の自尊感情”から発生しているとされる「本来感」と、自己価値の感覚が何らかの外的な基準上での査定に依存しており、その基準上で高いパフォーマンスを達成することで得られる自尊感情である“随伴性自尊感情”から発生しているとされる「自己価値の随伴性」を測定する。各項目について5件法で評定させた。

(4) 親との心理的関係を測定する尺度

井上³⁾が作成した、親への依存欲求尺度(15項目)と親への独立欲求尺度(15項目)を混合して30項目からなる尺度を作成し、使用した。この尺度は、青年期後期にある大学生を対象として作成されたもので、井上の仮説によれば、自我同一性の探求が始まる青年期には、依然として子どもを管理しようとする親に対して自らの独自性を失うまいとする独立欲求が子どもに生じる一方で、情緒的にも行動的にもまだ親から完全に分離して生きてはいけないために、児童期の安定した依存状態に戻ろうとする依存欲求も生じるという。その結果、子どもには親に対する依存-独立の葛藤が生じ、その葛藤を解決する過程で、自分の行動や感情を自分がコントロールしているという感覚である自律性が発達し、他者との関係が依存しすぎ拒否的にもなっていない適当な対人関係を保つことができいくという。各項目について5件法で評定させた。

2. 3. 仮説

予備調査の結果から、

仮説1. 児童期に親からのよい子願望を受けたと感じている青年ほど、現在の自尊心感情の特徴として、本来感が低く、自己価値の随伴性が高いだろう。

仮説2. 現在の親との心理的な関係の特徴として、依存欲求が高い・独立欲求が高い・双方の欲求が高く強い葛藤状態にある、など親からの自立を獲得していない状態にある青年ほど、現在の自尊心感情の特徴として、本来感が低く、自己価値の随伴性が高いだろう。

以上の2つの仮説を立て、その検証を行った。

2. 4. 結果

2. 4. 1. 質問紙の妥当性と信頼性の検討

親のよい子願望尺度について、因子分析を行ったところ3因子に収束した。各項目の因子負荷量、各因子の因子間相関、 α 係数の値を、以下の表1. に示す。

表1. 親のよい子願望尺度 因子負荷量と α 係数

項目	I	II	III	
11 良い成績をとること	.951	-.093	.013	
1 テストでいい点を取ること	.940	-.020	-.076	
5 成績がクラスで上位であること	.924	-.023	-.014	
8 勉強ができる子になること	.921	-.041	.001	
17 テストでは8割以上の点数をとること	.888	.007	-.071	
14 成績を落とさないこと	.869	.070	.004	
6 まじめにコツコツ努力すること	.408	.177	.255	
2 礼儀正しいこと	.252	.156	.223	
10 落ち込まないこと	-.165	.780	-.091	
15 何でもかんでも人に(親に)聞かないで自分で考えること	.062	.641	-.061	
16 愚痴を言わないこと	-.027	.629	.040	
7 人に嫌なことをされてもいらいらしないこと	-.039	.517	.079	
3 同じ失敗を繰り返さないこと	.197	.373	.177	
4 泣かないこと	.210	.348	.007	
13 家族を困らせないこと	-.032	-.078	.949	
12 わがままを言わないこと	-.075	.108	.727	
9 自分から進んで手伝いをすること	-.052	.153	.217	
	因子間相関	I	II	III
	II	.250		
	III	.381	.659	
	因子ごとの α 係数	.929	.742	.654

因子抽出法: 主因子法、回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

第一因子は、「親が子どもに、学校場面や人前などの社会的場面で高い評価を得るような行動を求める項目」がまとまったため、「学校・社会よい子因子」、第二因子は、「親が子どもに、ネガティブな感情の抑制やコントロールを自ら行うよう求める項目」がまとまったため、「感情自律因子」、第三因子は、「親が子どもに、家庭内で親や家族を煩わせず助けるような行動を求める項目」がまとまったため、「家庭内よい子因子」とそれぞれ命名した。

自尊感情を測定する尺度と、親との心理的關係を測定する尺度についても、先行研究通りの因子妥当性と信頼性が得られた。

2. 4. 2. 男女の平均値の差の分析 (t 検定)

回答者を男女に分け、測定した各変数について平均値に有意差があるか、t 検定を行った。

(1) 親のよい子願望

親のよい子願望得点には、性差は認められなかった ($t(248)=0.142, n. s.$)。よい子願望の各因子ごとに分けて分析した場合も、性差は認められなかった。

(2) 本来感, 自己価値の随伴性

2種類の自尊感情について平均値の差の検定を行うと、本来感に性差が認められ ($t(248)=2.762, p<.01$)、男性のほうが有意に高いことがわかった。また、自己価値の随伴性についても性差が認められ ($t(248)=3.076, p<.01$)、女性のほうが有意に高いことがわかった。これらの結果を図1. に示す (** $p<.01$)。

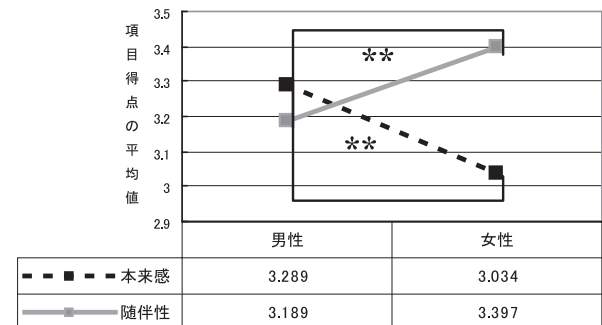


図1. 男女別にみた自尊感情得点

(3) 親への依存欲求・独立欲求

依存欲求得点には性差が認められ、女性のほうが有意に高いことがわかった ($t(248)=6.740, p<.01$)。また、独立欲求について性差は認められなかった ($t(248)=0.753, n. s.$)。これらの結果を図2. に示す。

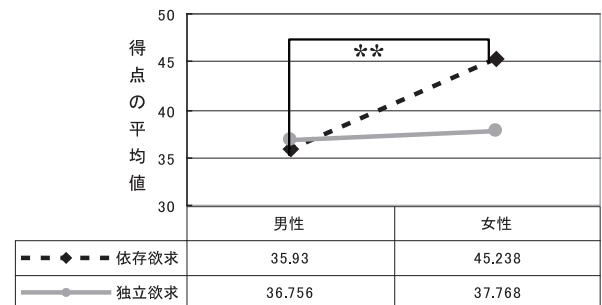


図2. 男女別にみた依存・独立欲求得点

2. 4. 3. 仮説の検証 (分散分析)

(1) 親のよい子願望と自尊感情の分析 (仮説1の検証)

2. 4. 2. (2) にて、2種類の自尊感情それぞれに性差が認められたため、性別とよい子願望を独立変数、2種類の自尊感情を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、本来感を従属変数とした場合、性

別が本来感に主効果を与えている (F (1, 246) = 7.798, MSE = 184.292, p < .01) ことがわかった。自己価値の随伴性を従属変数とした場合は、性別の主効果 (F (1, 246) = 11.592, MSE = 564.756, p < .01) が認められ、よい子願望を因子ごとに分析した場合、第一因子である「学校・社会よい子因子」 (F (1, 246) = 12.122, MSE = 588.223, p < .01) と第三因子である「家庭内よい子因子」 (F (1, 246) = 5.614, MSE = 280.371, p < .05) の主効果が認められた。

(2) 親への依存欲求・独立欲求と自尊感情 (仮説2の検証)

2. 4. 2. (2) と (3) にて、親への依存欲求と本来感、自己価値の随伴性には性差が認められたため、性別を独立変数に加えた。また、親への依存欲求・独立欲求については、各変数の (平均値 + 標準偏差), (平均値 - 標準偏差) の値で欲求の高さに3段階のレベルを設け、さらにその組み合わせによって対象者全員を9群に分けた。この9群を「葛藤の状態」として、独立変数に加えた。そして本来感、自己価値の随伴性をそれぞれ従属変数として2要因分散分析を行った。

その結果、まず本来感を従属変数としたときは、性別 (F (1, 232) = 3.328, MSE = 78.287, p < .10) と葛藤の状態 (F (8, 232) = 1.443, MSE = 33.946, p < .10) において有意な傾向が認められた。葛藤の状態において、Tukey HSDによる多重比較を行ったところ、葛藤が低い群 (依存: 低, 独立: 低) と葛藤が高い群 (依存: 高, 独立: 高) の平均値の差に有意な傾向が認められ、(依存: 低, 独立: 低) 群の方が (依存: 高, 独立: 高) 群よりも本来感の平均値が高いことがわかった。その結果を以下の表2. に示す (網掛けの群間において、10%水準で有意傾向あり)。

表2. 9群ごとの本来感の平均値

		依存欲求		
		低	中	高
独立欲求	低	24.44	23.30	22.32
	中	22.18	22.40	20.73
	高	21.12	21.11	19.64

次に自己価値の随伴性を従属変数としたときは、葛藤の状態の主効果が見られた (F (8, 232) = 4.623, MSE = 207.648, p < .01)。Tukey HSDによる多重比較を行ったところ、葛藤が低い群 (依存: 低, 独立: 低) は、葛藤が高い群 (依存: 高, 独立: 高) や、依存欲求が高い群 (依存: 高, 独立: 低, 依存: 高, 独立: 中), 独立欲求が高い群 (依存: 低, 独立: 高, 依存: 中, 独立: 高) よりも、自己価値の随伴性の平均値が有意に低いことがわかった。その結果を以下の表3. に示す (依存: 低, 独立:

低の群とその他の網掛けの5群間において、1%水準で有意差あり)。

表3. 9群ごとの自己価値の随伴性の平均値

		依存欲求		
		低	中	高
独立欲求	低	40.76	44.80	47.09
	中	44.11	44.60	49.88
	高	47.92	47.32	51.50

2. 4. 4. 因果関係の分析

統計ソフト Amos ver.5 を用いて、因果関係の分析を行った。これまでに行った分散分析結果から、親のよい子願望がその因子ごとに、2種類の自尊感情から発生している本来感と自己価値の随伴性、親との心理的な関係を表す一つの指標である依存欲求と独立欲求に影響を与えていると想定し、パス図を描いた。モデルの評価としてモデル全体の評価、部分評価の2段階を踏まえた。モデル全体の評価としては、 χ^2 乗検定、適合度指標 (GFI, AGFI, RMR), 情報量基準 (AIC) を指標とした。モデルの部分評価としては、パス係数の数値の t 検定を行い、有意水準を満たしているか否かを評価の指標とした¹⁶⁾。これらの基準を指標としながら、各変数間のパスをひいたり削除したりして、より高い適合度を示すモデルを探索した。また、自尊感情、親への依存欲求・独立欲求ともに男女差が認められたため、男女ごとに分けてパス図を描いた。

まず対象者を男性のみに限定して描いたパス図を以下の図3. に示す。(e1 ~ e7は、それぞれ誤差を示す。片方向きの矢印は因果関係を表し、矢印上の数値は標準偏回帰係数を示す。双方向の矢印は相関関係を表し、矢印上の数値は相関係数を示す。**p < .01 *p < .05)

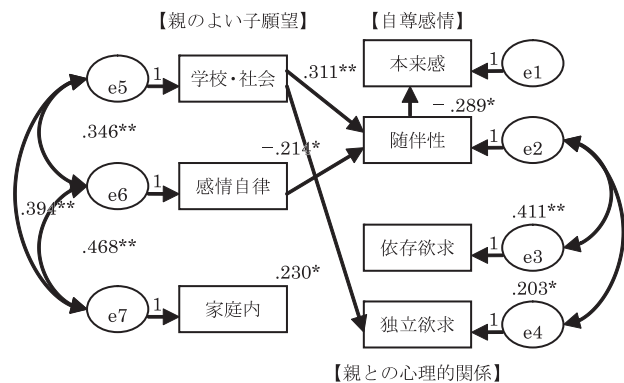


図3. 男性における各変数の因果関係 (男性: N = 86)

モデル全体の評価として、 χ^2 乗値が9.441で有意確率.665より有意でなく、GFI = .972, AGFI = .934, RMR

= 2.277, AIC = 41.441であり十分な値を示していたため、このモデルを採用した。

次に対象者を女性のみ限定して、パス図を描いた。その結果を以下の図4. に示す。

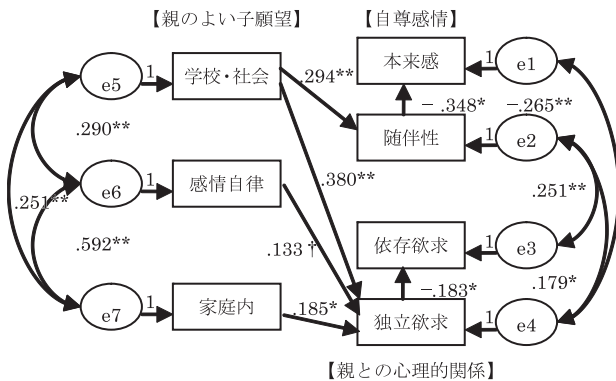


図4. 女性における各変数の因果関係 (女性：N = 164)

モデル全体の評価として、 χ^2 乗値が5.708で有意確率.769より有意でなく、GFI = .990, AGFI = .970, RMR = 1.434, AIC = 43.708であり十分な値を示していたため、このモデルを採用した。

2. 4. 5. 結果のまとめ

以上の分析 (2. 4. 1. ~ 4.) から、仮説1 ~ 2について以下の結果が得られた。

- ①児童期に、特に学校・社会場面、または家庭での場面で、親からよい子願望を受けたと感じている青年ほど、自己価値の随伴性が高い。また、自己価値の随伴性から本来感へ負の因果関係が認められた。
- ②親との心理的な関係の特徴として、葛藤が強い状態にある青年のほうが、葛藤が弱い状態にある青年よりも本来感が低い傾向があり、依存欲求が高い・独立欲求が高い・双方の欲求が高く強い葛藤状態にある、など親からの自立を獲得していない状態にある青年ほど、自己価値の随伴性が高かった。
また、仮説では想定していなかった結果として、以下のような結果が得られた。
- ③男性の方が女性に比べて本来感が高く、女性の方が男性に比べて自己価値の随伴性が高い。
- ④女性の、親との心理的な関係の特徴として、男性に比べて依存欲求が高い。
- ⑤男女ともに、親のよい子願望の中でも「学校・社会よい子因子」が自己価値の随伴性に正の影響を与えている。特に男性においては「感情自律因子」が自己価値の随伴性に負の影響を与えている。
- ⑥男性においては、親のよい子願望の中でも「学校・社会よい子因子」が、女性においては、「学校・社会よい子因子」「感情自律因子」「家庭内よい子因子」の全

ての因子が、独立欲求に正の影響を与えている。

3. 考察

3. 1. よい子願望と各因子について

2. 4. 1. より、独自に作成した親のよい子願望尺度の因子分析結果では、第一因子である「学校・社会よい子因子」と第三因子である「家庭内よい子因子」には、それぞれ学校場面・社会的な場面、家庭内の場面で、「よい子」にふさわしい行動や態度をとることを子どもに求める項目が集まった。そして、第二因子である「感情自律因子」には、子どもにネガティブな感情を抑制するよう求める項目のほか、感情や意志を子ども自身がコントロールすることを求める項目が集まった。このように親のよい子願望は、大まかに見て具体的な場面での行動に関するものと感情に関するものとに分かれ、それらが因子にまとまったものと考えられる。

大河原^{13) 14)} は、自分の子どもが他者から賞賛され、親としても心地よくいられることを望む親の姿勢が強いと、子どもの感情制御が発達不全に陥る可能性を指摘している。本調査の因子分析結果に大河原¹³⁾ の見解を照らし合わせると、第一因子の「学校・社会よい子因子」には“他者から賞賛される「よい子」を求める願望”が、第二因子の「感情自律因子」と第三因子の「家庭内よい子因子」には“親にとって心地よい「よい子」を求める願望”が、それぞれ反映されていると考えられる。

3. 2. 自尊感情とその性差について

2. 4. 2. (2) より、2種類の自尊感情については、それぞれ性別による影響が示唆され、男性は本来感が高く、女性は自己価値の随伴性が高いことがわかった。つまり、適応的な自尊感情は男性のほうが高く、不適応的な自尊感情は女性の方が高いという可能性が示唆された。

山本・松井・山成²⁷⁾ は、大学生における自己評価得点は男子のほうが女子よりも有意に高いことを明らかにしている。また、自己概念と自己評価の関連性を検討し、男子の場合には、自己認知の側面の中で、自己評価の高さに最も強く寄与しているのは「生き方」と「知性」であり、男子の自己概念には、自己の内面的な資質が最も大きな意味を持っているのに対し、女子の場合には「優しさ」と「容貌」の側面が非常に高い重要度を持っていることを明らかにしている。そして、これらの内容の考察において、女子の場合には、他者との関わりの中で、自己評価が決まっているように思われると述べている。これは、本研究で得られた男女における自尊感情の質の違い、つまり男性のほうがありのままの自分を受け入れ

ることで得られる本来感から自尊感情を得ており、女性は何らかの外的な基準上で高いパフォーマンスを行うことで得られる自己価値の随伴性から自尊感情を得ている傾向があることを裏付けるものであると考えられる。

3. 3. よい子願望と自尊感情との関係について

2. 4. 3. (1) より、親のよい子願望の第一因子である「学校・社会よい子因子」と第三因子である「家庭内よい子因子」から、自己価値の随伴性に対する主効果が認められた。つまり、学校や人前などの社会的場面や家庭内の場面でよい子でいなければならないという願望を、児童期に親から受けたと感じている青年のほうが、現在の自己価値の随伴性が高い傾向がある可能性が考えられる。

この結果は、親から日常のあらゆる場面での高いパフォーマンスを習慣的に求められ、それを親が望むように達成したときに賞賛や承認を与えられることを幼いころから繰り返しながら育ってきている青年ほど、何らかの外的な基準上で高いパフォーマンスを行い他者からよい評価を得るということが、自己価値の感覚においても重要な地位を占めていることを示していると考えられる。自分の能力を外的な基準や他者からの評価に照らし合わせることは、客観的な自己評価方法といえるが、自己価値の感覚を他者の評価からしか得られないという状態は、思春期・青年期にさしかかった子どもの心に大きな不安定をもたらすことが予想される。

竹森²⁰⁾の過食を呈した思春期女性3症例の事例研究では、彼女たちに共通する特徴としていわゆる「よい子」であり、「自分にどのような価値があるのか」、「どう評価されるのか」といった不安が自己の不在感を生み出し、対象へのしがみつきとして行動化されていることが述べられている。そして、彼女たちが「自分らしさ」という自己同一性を確立していくに従って、外的依存性の強い「よい子」であることが次第に放棄されていく過程が記述されている。

また、因果関係の分析において、男女共に「学校・社会よい子因子」が自己価値の随伴性に正の影響を与えていたが、特に男性においては「感情自律因子」が自己価値の随伴性に負の影響を与えていることがわかった。これは、女性においても男性においても、学校などの社会的場面で高い評価や賞賛を得ることが、自己価値を感じる上で重要であることを意味していると同時に、男性において、感情の抑制やコントロールを求めるといった親の願望は、子どもの不適応的な自尊感情さえ阻害する可能性を示唆しているといえる。日本社会において特に男性は、「男の子なのだから、泣いてはいけない」など、幼い

頃からネガティブな感情表出を禁止される傾向がある。大河原¹²⁾によると、よい子が突然さされる事例の親子関係には、子どものネガティブな感情表出を親が何らかの形で罰しているケースが多く見受けられ、そのような事例では、親は感情表出そのものをしかる傾向があり、しかる回数が少ないとしても子どもは大変なダメージを受ける可能性があるという。男性の因果関係分析の結果は、上記のような背景を反映している可能性が考えられる。

もう一方の自尊感情である本来感については、親のよい子願望との間に有意な関係は認められなかったが、因果関係の分析において、男女共に、自己価値の随伴性から本来感へ有意な負のパスが引かれた。この結果は、外的基準による評価に準拠して自尊感情を保っているほど、ありのままの自分自身に価値を認めることに困難さをもたらしていることを示唆すると同時に、その逆の関係性、つまり自己価値の外的準拠が薄らげば、ありのままの自分に価値を認めることで感じられる自尊感情を高められる可能性を示唆していると言える。従って、自分のありのままを承認し、ありのままの自分に価値を感じられる自尊感情である本来感を高めるように心理的支援をすることが、「よい子」として育ってきた人にとって大きな援助の意味を持つ可能性が考えられる。

3. 4. 親への依存欲求・独立欲求と自尊感情について

2. 4. 3. (3) の親への依存欲求・独立欲求の程度によって9群に分けた分析では、葛藤が低い群よりも高い群の方が、本来感が低い傾向があり、自己価値の随伴性については、葛藤が低い群よりも高い群の方が、自己価値の随伴性が高く、また、依存欲求が高い群や独立欲求が高い群の方が、自己価値の随伴性が高いという結果が得られた。つまり、親との葛藤や欲求を高く保持しているということは、未だに青年の自己が親の影響を受けやすい状態にあり、外的な基準上で高いパフォーマンスを行うことでしか自己価値の感覚を得ることができないと考えられる。

富澤²⁵⁾は、親から心理的な独立をしていない段階にある「親への対立」「親への服従」などの関係性は、子どもは親の期待から影響を受け、負担感に影響していると述べている。一方、親から心理的に独立している「一人の人間同士としての親子」という関係性は、子どもは親の期待からの影響を受けず、負担感への影響もみられなかったという。これらのことから、未だ親に対して何らかの葛藤を有し、自己を確立しきれていない青年は、独立した一人の個人として、自分で自分を肯定し承認することのみで安定を得ることが未だに難しい状態にあると考えられる。

また、因果関係の分析により、男性においては、親のよい子願望の中で特に第一因子である「学校・社会よい子因子」が、独立欲求に影響を与えている可能性が示唆された。これは、男性の場合、学校で良い成績を取ったり社会的な場面で高い評価を得ることが、将来の進学や社会的な成功につながる重要な事柄として意味づけられやすいためであると推測される。女性においては、「学校・社会よい子因子」「感情自律因子」「家庭内よい子因子」の全ての因子から、独立欲求に影響を与えられている可能性が示唆された。これは、日本社会において女性の場合、「よい子」であるためには、男性のように学校場面や社会的場面で高評価を得る他に、わがままを言わずしとやかに振舞うことや、気持ちをコントロールして落ち着いた振る舞いをする、家族を支え助けるなどの役割を進んで担う事などを、男性よりも求められやすいという背景が存在しているためであると考えられる。男女ともに、これらの要求を受け続けてきた結果、青年期に親への独立欲求が高まったのではないかと推測する。

4. 今後の課題

本調査では、回答者に、よい子願望を抱いている親が父親か母親かを特定せずに回答してもらった。しかし、結果の分析において、よい子願望を受ける立場である子どもの自尊感情や親への依存欲求・独立欲求に、性別によって異なる特徴が予想以上に多く見られた。このことから、よい子願望を抱く立場である親の性別や、親子の性別の組み合わせ（母一娘、父一息子、母一息子、父一娘）によって、その関係性に何らかの特徴を有している可能性が考えられる。残された課題として、親子それぞれの性別を考慮した上で、よい子願望の抱き方の特徴や相違を調べていく必要がある。

また、本研究の結果から、「よい子」として育ってきた人にとって、ありのままの自分自身に対して感じる自己価値の感覚である本来感を高めることの重要性が示唆されたが、一方で、自尊感情との希薄な関係性が示された。親のよい子願望尺度の第2因子である「感情自律因子」については、他の観点からのさらなる研究が必要であろうと思われる。大河原¹⁴⁾は、ネガティブ感情を自己に統合できない子どもたちの多くは、過剰適応的な「よい子」の自分と、ネガティブ感情制御が困難な「悪い子」の自分との解離を特徴とする自己を形成し、場面によってモードの違う行動様式を示すことによって、「適応」を保障している現状を指摘しており、その背景には親子のコミュニケーション不全、ひいては愛着システム不全の

問題があると指摘している。よって、上記のような解離を用いた環境への適応や、心身症、強迫症状などの子どもの症状と、親とのコミュニケーションの中で形成された子どものネガティブ感情制御との関係性について調査を行うことが、今後の課題として挙げられる。

また、今回の調査では、主に子どもの側に焦点を当て、子どもが感じた親のよい子願望を調べたが、よい子願望を抱く親の側には、完璧主義、育児不安、他の子どもとの比較による焦り、親自身もよい子として育てられた経験など、さまざまな背景や要因が存在する可能性が考えられ、それらが相互に絡み合い、子どもへの過剰なよい子願望が形成されると思われる。よって親側の心理も視野に入れ、よい子願望につながる要因やその相互関係などを明らかにすることは、親子が「よい子」という縛りにとらわれず、自由な心の交流をしながら関わっていけるように、援助者として支援する上でも、意義のあることと思われる。

付記：本稿は第2執筆者の指導の下に、第1執筆者が東京学芸大学卒業論文（平成19年度）として提出したものをまとめ直したものである。調査を行うに当たりご協力いただいた多くの方々へ、この場を借りて感謝の意をお伝え致します。

5. 引用文献

- 1) Deci, E. L., & Ryan, R. M. : Human autonomy : The basis for true self-esteem. *Efficacy, agency, and self-esteem*, New York: Plenum. 31-46, 1995.
- 2) 池谷壽夫：『教育』からの離脱 青木書店, 2000.
- 3) 井上忠典：大学生における親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連について 筑波大学心理学研究, 17, 163-173, 1995.
- 4) 伊藤正哉・小玉正博：自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85, 2005.
- 5) 伊藤正哉・小玉正博：大学生の主体的な自己形成を支える自尊感情の検討——本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して—— 教育心理学研究, 54, 222-232, 2006.
- 6) 柏木恵子：子どもという価値 中公新書, 2001.
- 7) Kernis, M. H. : Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26, 2003.
- 8) 河村照美：親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, 4, 101-110, 2003.
- 9) 小林正幸：事例に学ぶ 不登校の子への援助の実際 金子書房, 2004.

- 10) 小泉英二編著：登校拒否——その心理と治療 学事出版, 1973.
- 11) 尾木直樹：思春期の危機をどう見るか 岩波新書, 2006.
- 12) 大河原美以：親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響——「よい子がされる」現象に関する試論—— カウンセリング研究, 37, 180-190, 2004a.
- 13) 大河原美以：怒りをコントロールできない子の理解と援助 金子書房, 2004b.
- 14) 大河原美以：子どもの心理療法にEMDRを利用することの意味——感情制御の発達不全と親子のコミュニケーション—— こころのりんしょう à la carte, 27 (2), 293-298, 2008.
- 15) 岡田和史：ひきこもりの精神病理 村尾泰弘 (編) 現代のエスプリ別冊 ひきこもる若者たち 至文堂, 2005.
- 16) 小塩真司：SPSSとAmosによる心理・調査データ解析——因子分析・共分散構造分析まで—— 東京図書株式会社, 2004.
- 17) R. T. シャーマン・R. A. トンプソン (著) 齊藤学 (監訳)：「良い子」と過食症—家族と援助者のためのQ&A 創元社, 1997.
- 18) 齊藤学：アダルト・チルドレンと家族 学陽書房, 1996.
- 19) 庄司知明・藤田尚文：親の価値観が子どもの価値観に及ぼす影響 高知大学教育学部研究報告 第2部, 58, 1-12, 1999.
- 20) 竹森元彦：過食を呈した思春期女性の3症例——「良い子」から「自分らしさ」へ：女性の自己確立への葛藤—— カウンセリング研究, 33, 211-222, 2000.
- 21) 田中宏二・小川一夫：教師職選択に及ぼす親の影響：子の認知した親の期待と職業モデル 教育心理学研究, 30, 257-262, 1982.
- 22) 丹羽洋子・竹葉友美：いわゆる「よい子」の内的適応について (1) ——自己意識との関連から—— 日本教育心理学総会発表論文集, 38, 522, 1996.
- 23) 丹羽洋子・竹葉友美：いわゆる「よい子」の内的適応について (2) ——精神的健康度 (Subjective Well-being) の視点から—— 日本教育心理学総会発表論文集, 38, 523, 1996.
- 24) 徳田完二：青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究, 58 (1), 8-13, 1987.
- 25) 富澤麻美：青年期における親の期待とその負担感に関する研究——大学生・専門学校生を対象に—— 修士論文要旨 早稲田大学人間科学研究, 18, 35, 2005.
- 26) 山川法子：いわゆる「よい子」の特徴および「よい子」を作り出す規定因に関する考察 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学, 48 (1), 47-55, 2001.
- 27) 山本真理子・松井豊・山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68, 1982.

親のよい子願望が子どもの自尊感情に与える影響

—— 親への依存欲求・独立欲求に注目して ——

The effect of parental expectation for good-child on child's self-esteem

—— child's needs for dependency and independence ——

市 毛 睦*・大河原 美 以**

Mutsumi ICHIGE, Mii OHKAWARA

教育心理学

Abstract

The purpose of this study is to measure the child's subjective feeling about his or her parents' expectation for good-child when he or she were pupil and examine the effect of his or her parents' expectation on child's present self-esteem. In addition, child's needs for dependency and independence on his or her parents are measured to examine their present psychological relationship. This study used questionnaires for university students.

This research obtained the following results : 1) The child who has high subjective feeling of parental expectation for good-child when he or she was pupil tends to have high contingency of self-worth; 2) The child who has high need for dependency, need for independence or dependency-independence conflict with his or her parents tends to have high contingency of self-worth.

In addition, causal relation analysis suggested that school-social good-child factor that is a factor of parental expectation for good-child has a positive effect on both male and female contingency of self-worth, contingency of self-worth has a negative effect on sense of authenticity, and emotion control factor that is a factor of parental expectation for good-child has a negative effect on male contingency of self-worth.

Key words: parents and child, good-child, self-esteem, sense of authenticity, contingency of self-worth

Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、子どもが児童期に主観的に感じていた親のよい子願望を測定し、親のよい子願望が子どもの現在の自尊感情に与える影響を調査することである。さらに、親との現在の心理的關係を測定するために、親に対する子どもの依存欲求と独立欲求を測定した。本研究では、大学生を対象に質問紙調査を行った。

調査によって、以下のような結果が得られた。1) 児童期に親からのよい子願望を受けたと感じている子どもほど、現在の自己価値の随伴性が高い。2) 依存欲求が高い・独立欲求が高い・双方の欲求が高く強い葛藤状態にあるなどの子どもほど、自己価値の随伴性が高い。

また、因果關係の分析においては、男女ともに、親のよい子願望の中でも「学校・社会よい子因子」が自己価値の

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

随伴性に正の影響を与えており、自己価値の随伴性が本来感に負の影響を与えており、男性においては「感情自律因子」が自己価値の随伴性に負の影響を与えている可能性が示唆された。

キーワード: 親子, よい子, 自尊感情, 本来感, 自己価値の随伴性